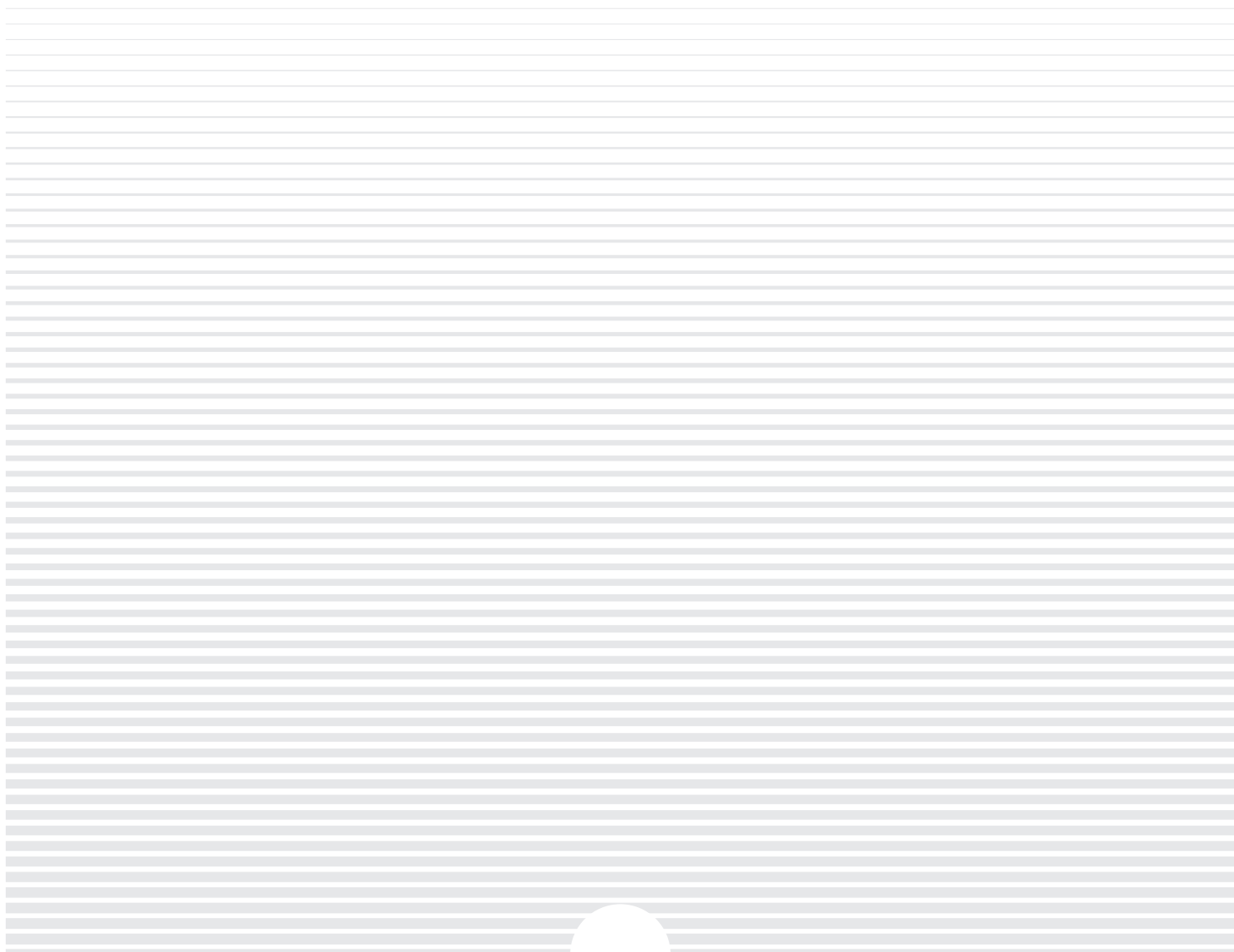




# 2013年度中部圏大学 人材育成チャレンジ報告





# 2013年度 中部圏大学人材育成チャレンジ報告

1. 大学名 豊橋創造大学短期大学部

2. 事業を遂行する上で現在達成しようとしている目標  
産業界ニーズを反映した教育改革力の育成・強化

3. 分類（該当する項目すべてに☑）

- |  |  |                                    |
|--|--|------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> アクティブラーニング | <input type="checkbox"/> インターンシップ      | <input type="checkbox"/> 産業界ニーズの把握 |
| <input checked="" type="checkbox"/> 地域・産業界との連携 | <input type="checkbox"/> 学内コンセンサス      | <input type="checkbox"/> 教育組織・体制整備 |
| <input type="checkbox"/> FD・SD・教職員研修           | <input checked="" type="checkbox"/> 評価 | <input type="checkbox"/> 基礎学力      |
| <input type="checkbox"/> 学生の質の変化               | <input type="checkbox"/> 初年次教育・研修      | <input type="checkbox"/> リーダーシップ   |

4. 目標を達成するための課題

地域組織・企業へのヒアリングを通して再確認した産業界ニーズを科内で共有し、その産業界ニーズを反映した「社会人基礎力」育成のために、プロジェクト活動を中心としたアクティブラーニングを実施する。

5. 課題の分析（障害となる要因）

①板挟みになる短大 一限られた期間で資格と社会人基礎力育成に取り組む必要がある

- ・学生や保護者からは資格取得支援を求められる。
- ・実社会からは、コミュニケーション能力などの社会人基礎力を求められる。
- ・学生は、社会人基礎力の必要性を実感していない。
- ・実社会は、学生の人物重視で、学業成績をそれほど評価しない。

②教員の意識改革

- ・なぜうまくいっている現状を変えなければならないのか。教員も学生も満足している。
- ・専門知識を効率よく身につけさせるため 15 回の授業を設計してきた。
- ・「学生の授業評価アンケート」にも応え、学生の満足度をあげてきた。
- ・教員は専門知識を求められ、教育力を問われることがなかった。
- ・教育内容は更新・改善されてきたが、教育方法は変化してこなかった。

③アクティブラーニングをどうやって授業に取り入れるのか

- ・教員は、わかりやすい授業にする努力を続けてきた。学生に「考える力」はつかなかった。
- ・どうやったら「社会人基礎力」を育成できるのか、コンセンサスがない。
- ・アクティブラーニングを進めていくための具体的スキルが身につけていない。

④エビデンス、評価、改善をどうするのか

- ・学生だけでなく、教員も「ポートフォリオ」という形で実績を積み上げる必要が出てきた。
- ・「社会人基礎力」が育成できているのか、第三者に対して説得力ある方法で説明できない。
- ・キャリア教育・アクティブラーニングと「社会人基礎力」育成との相関がうまくとれない。
- ・評価の結果、学生の足りない資質がわかっても、それを伸ばす仕組みがわからない。

## 6. 課題を克服するチャレンジ事項

### ①資格取得と社会人基礎力育成のどちらにも取り組む（課題①への対応）

- ・正課の開講科目でも、授業時間内で資格取得支援を行う。
- ・グループワークを導入しやすいプロジェクト活動で社会人基礎力を育成する。
- ・一般授業科目でも、アクティブラーニングの導入を始める。
- ・授業科目と育成できる資質の対応関係を示す「カリキュラムマップ」を作成する。
- ・カリキュラムマップに基づいて、各開講科目のシラバスを改訂する。
- ・アクティブラーニングに対応できるように、各科目の準備学習を強化する。

### ②教員の意識改革を進めるために、連携FDを活用する（課題②への対応）

- ・他大学の先駆的取組を教員に紹介する。
- ・大学のユニバーサル化に対応できている大学とそうでない大学の差が出始めた。
- ・大学のブランド力よりも教育力が注目されるようになってきた。
- ・他大学の、教員の意識改革への取組を紹介する。

### ③アクティブラーニングの導入を始める（課題③への対応）

- ・他大学の事例を教員に紹介する。
- ・連携FDで学んだ、ちょっとしたコツ、スキルを教員で共有する。
- ・学内で、外部講師を招いて勉強会を開催する。

### ④社会人基礎力育成の評価方法を検討する（課題④への対応）

- ・豊橋創造大学とともに、PROGの活用方法を検討する。
- ・連携している名古屋商科大学をはじめ、既にPROGを活用している大学の事例を研究する。
- ・ルーブリックによる評価の検討を始める。

## 7. 現時点でのチャレンジ実績

### 短大独自の事業について

- ・平成26年度から、正課の授業科目で資格取得支援をする。
- ・プロジェクト活動を実践しており、8月に中間報告書を提出している。
- ・社会人基礎力への対応を盛り込んだキャリアマップを作成中である。
- ・秋学期から、一般授業科目でアクティブラーニング導入を始める。

### 連携事業について

- ・6月7日に、学内で「教育改革フォーラム」を開催した。  
名古屋商科大学・亀倉正彦教授のPROGを用いた教育効果測定についての講演  
短大部から、「アクティブラーニング」に取り組む際のチャレンジについて発表
- ・8月21日に、産業界ニーズGP短大連携会議を開催した。  
各短大の取組内容の理解、現場の情報共有
- ・8月25日/26日に、東海Aチームで合宿研修を実施した。  
各大学の取組内容の理解、現場の情報共有  
帝京大学・土持法一教授のアクティブラーニングについての講演

## 8. 中部圏産学連携会議等を通して、地域・産業界とともに検討したい課題

※報告書に基づいた類型ごとに分科会をつくり議論するということであれば、「アクティブラーニング」とか「評価」について考え抜くグループに参加したい。

※「高次のアクティブラーニング」とか「インターンシップの高度化」を標榜する大学・短大が多いが、最初からやる気のある学生に絞り成果をあげるというのではなく、科に所属するすべての学生を対象にして底上げをはかることにチャレンジしたい。孤立している学生を見放さない大学・短大と議論したい。

●アクティブラーニングの照準はどこに合わせたらいいのか。

教育の質保証のためには、中・上位を対象にし、下位層の学生に過度にこだわらないことだという。大学のユニバーサル化の時代、小規模校ではレベル別クラス編成もできず、上位半分を伸ばすことを心がければよいのか。

PBL も、やる気があり、伸びしろのある学生だけを対象にすれば、成果はあがって当然なのだが。

●PBL の代表的な活動である「プロジェクト」運営について、直面する課題を議論したい。

プロジェクト担当教員として個別のプロジェクト運営についての議論でもよいし、活動全体を俯瞰する形で、プロジェクト活動というプログラムをどう活性化するかという議論でもよい。

●全員を対象とした場合、「アクティブ」を仕掛ける前に、どうやって個々の学生の「モチベーション」・やる気を引き出したらいいのか。

●「社会人基礎力」の優先度については、当面の即戦力を求める人事担当者とは、大局的な見方ができる経営者とは、異なるのではないのか。

●正課外の活動は、やりたい教員や、やれる教員が関わる物好きなボランティア活動か。

●評価可能な達成目標とは何か。

目標設定に学生をどう関わらせるのか。教員の側で、授業科目の目標設定さえ、しっかりできていれば学生は目標を気にしないで、半期後に身についた力を自己評価できるものなのか。

●アクティブラーニングで、学生のどういう資質を引き出そう・伸ばそうとしているのか。

アクティブラーニングを取り入れている授業では、どう成績評価するのか。

アクティブラーニングの成果を評価できる定期試験はどうつくるのか。

●アクティブラーニングの出来・不出来は、教員の資質に依存する面が多いような気がする。

よい事例を提示し、水平展開できるものなのか。

# 目標：産業界ニーズを反映した教育改革力の育成・強化

